

ゼロの使い魔 異常な  
力を持った普通な一般  
人？

ディアズ・R

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一般人が異常な力を貰って転生するお話。

普通な一般人の普通な生活……世界はカオスとなる。

重要なのは、主人公が一般人だということ。

忘れないでほしい……この主人公は、変態ではないということをし！

# 目次

|       |    |
|-------|----|
| プロローグ | 1  |
| 第一話   | 5  |
| 第二話   | 10 |
| 第三話   | 15 |
| 第四話   | 21 |
| 第五話   | 26 |
| 第六話   | 32 |
| 第七話   | 37 |
| 第八話   | 43 |
| 第九話   | 48 |
| 第十話   | 53 |
| 第十一話  | 60 |

|      |    |
|------|----|
| 第十二話 | 66 |
| 第十三話 | 72 |



## プロローグ

死んだなう。

「アホか……」応言っておくが、我は神だ」

婆口調合法ロリ神k t k rなう。

「……このまま消してしまおうか」

幼女物騒なう。

「よし、消そう」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「……まあよい」

冗談の通じないロリだ。

「これだから最近の若者は！

「……口にしなければ大丈夫だとも思っておるのか？」

「……それより本題に入ってくださいあ」

「……まあいいじやろう、お主には転生し——」

「テンプレ乙」

「……渡す力はなにがいい……3つまでならどんな物でもよいぞ」

ロリの目が怖いです。

しかし、ガクガクするよりハアハアします。

もつと！もつと蔑んで!!

「……寒気がする」

おつと、ロリコン紳士として幼女に引かれるわけにはいかないな！

えつと、欲しい能力は……

「ドラクエシリーズに出る魔法全部と、どんな物でも創れる想像具現」

「どこに行く気じゃ？普通の世界に転生させるつもりなのじゃが……」

恐怖政治万歳。

弱肉強食つて、世の真理よね。

破壊神に、俺はなる！

「頭可笑しいんじゃないのか？……別の世界に送るか」

日常を非日常に変えるつもりだったのに……しよぼーんだよしよぼーん。

もつというなら、どよーん。

それはさておき。

「最後の一つは肉体スペックでたのんまさ〜」

俺を幼女にしてくれても、良いんだよ？

「……なにもいわんぞ」

……しよぼーん。

「氣と魔力をだいたい無限で、身体能力はなんでもいいや。あ、スーパーサイヤ人Ⅲまでなれる様にお願いします」

「何故サイヤ人？しかもⅢまで？Ⅳの方が強いと思うが？」

「昨日見たから。あとⅣは認めない！だってサルなんだもん！」

「そうか……うむ、それでよいか？」

モーマンタイ。

大丈夫だ、問題無い。

君に決めた！

「……では、行つて来い」

えくもつとお話しようよ

メルアド交換しようぜwwww

「断る！我は忙しいのだ！」

そう言いつつ会話してくれるロリ神様が好き。

クンカクンカ、良い匂いだお。

「うぐつ……いい、良いからさっさと行くがいい！」

ツンデレ幼女 P r P r したいです。

でも我慢だ！まだ捕まりたくないからな！

……ん？もう捕まらないんじゃないやね？

「!？」

ふむ……いや、今回はやめておこう。

もうチョイ好感度上がってからじゃないと死んじやう気がする。

くくく、幼女よ……次会う時が貴様の最後だ!!

というわけで——

「逝ってきまゝす」

「……逝ってらっしゃい」

異常な力を持った普通な一般人（笑）な転生者の完成です。



# 第一話

転生なう。

これ飽きたな。

新しいの考えとこ。

「ライナ〜手伝つて〜」

「あ〜い」

貴族なリユートルー家の子、ライナ・リユートルー3歳。

将来の夢、料理人志望。

「相変わらず三歳児とは思えない手際の良さね……」

ちなみにこの世界は、ゼロの使い魔だった。

正直、名前ぐらいいしか知らんが。

なんだつけ、ファーストキスから始まる物語だつけ？

まあそんなことはどうでもよくて、我が家は中流貴族の中でも上のほうらしい。

母の名は、イルナ・リユートルー。

父の名は、リユーラ・リユートルー。

伝勇伝のライナパパとライナママだった。

魔眼は無かったぜよ……まあ、正直いらね。

だって、ドラクエ魔法使えるし、なにより殴った方が早いし。

「じゃあ、これ持つて行つてね？」

「うい」

何で能力もらつたんだっけ？正直いらね。

今の二回目だな。

料理を机に並べ、全員座つたら食事を始める。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

「うん、おいしいよイルナ。でも、君のほうがいいよイルナ。でも、君のほうがいいよイルナ。でも、君のほうがいいよイルナ。」

「まあ！ライナがいるのにそんな事言つてはダメですよ？それに、私も我慢できなくなつちやうわ♪」

「ふふ、君への愛が抑えられなくてね」

「もう、アナタつたら♪」

イチヤイチヤとピンク色な雰囲気を出すお二人。

ホント仲良いなこの夫婦。

とりあえず、俺は食後の散歩に行くことにした。

家にもすることないんだモノ。

あと、見えてイラツとする。

「「「ちそうさまでした」」」

「遊びにいてきまゝす」

「「いつてらっしやい」」

「イルナ……愛してるよ」

「リユーラ……私も……」

ほんとに仲良いな。

クツソ！俺も可愛い幼女とイチヤイチャしたい！

あ、俺も今シヨタだから合法だよ？ けてして幼女だからいいわけでは――

・  
・  
・

・  
・

・

散歩中の出会いは唐突に。

「ある日、森の中、風竜に、出会った」

「G A A A A A!!」

【ゲーム・オーバー】《バイオハザード風に》

（まだ早いわ!）

念話なう。

神って暇なのかな？

それとも……惚れられた？

（それはない）

……真剣な声で言わなくても。

（そんなことより！今こそ能力を使うときであろう!?!）

（それもそうだな！じゃあ、あれやる）

（あれ?）

右手を前に突き出して、唱える。

「これはメラではない……メラゾーマだ!!」

でかい火の玉が風竜に当たり爆発する……半分炭化した。

火の玉 T U E E E E E E。

例えるなら……

ライナのメラゾーマ。

風竜に274のダメージ。

風竜は倒れた。

ライナに100の経験値。

ゴールドはプライスレス。

(……とりあえず、逆じゃ。メラゾーマじゃなくメラを放て)

(ツツコミ御苦労)

(……ではな)

念話切れた。

暇なので、モンハン気分で剥ぎ取りをすることにした。

ナイフの代わりに、聖剣エクスカリバーを創って剥ぎ取ってみた。

はつきり言って剥ぎ取りにくかった、聖剣も大した事無いな。

もういらないので、適当な岩に突き刺して放置する。

「帰るか、ルーラ」

家に帰って玄関の扉を開けると………18歳未満は閲覧禁止なことをしていた。

二人と視線が合ったが、ニッコリと子供らしい笑顔で何も言わずに扉を閉めるのだった。

## 第二話

5歳キタコレ。

よっし、これでいこう。

「そろそろ魔法の練習をしようか」

「そうね、ライナは一回教えれば何でも出来るけど、魔法はどうなるのかしら？」

さいでつかく

この世界の魔法ってそんなに難しいの？

ぶつちやけマホトーンかければ余裕で勝てるんじゃないやね？

．．．．．

．．．

．

結果だけ言おう、俺が化け物だと分かった。

あれがそれを見た親のなれはてだ。

「……………」

何故こうなったか、説明でもして再起動を待つとしよう。

まずレベテーション。

通常であれば、使用者の頭らへんまで対象の物が浮かぶらしい。

俺が使うことによつて、文字通り星になりました。

人には使うなど注意された。

次にフライ。

普通なら軽く飛ぶぐらいの魔法らしい。

俺が使ったときは、もはや舞○術だった。

もう少しで大気圏突破して死ぬところだった。

多分生きてるだろうけど。

あまり使うなど注意された。

最後にやった属性魔法。

火ならファイア、水ならウォーター、風ならウィンド、土ならアース。

これらは練習次第で全員使えるようになるらしい、一発で成功する魔法が自分の属性らしい。

とゆうわけで、やってみた。

土…山が出来た。

火…噴火した。

水…湖が出来ました(笑)

風…湖が雨になりました。

まあ、使うことは無いだろう。

なぜかって？言っただろう、将来の夢は、料理人だと!!

「ライナ…魔法は、あまり使わないように、な？」

「あゝい」

魔法なんていらん。

でも、土系の練成は練習することにした。

ガラス職人もよさそうだから。

あ、風の偏在だっけ？アレも良さげ。

フツ残像だっけやりたい。

「竜狩りにいてきまゝす」

「……いつてらっしやい」

「……早く帰ってくるのよっ」

「うむ」



とても渋い顔だったとだけ言っておこう。

・  
・  
・

・  
・

・

竜YOEEEE。

今回の成果。

成体の火竜と風竜、あとバジリスク。

バジリスクがいきなり出てきて睨んで来やがったから、ニフラムで消してやった。

俺の邪魔をするから、こう言う事になるんだよ！

ところで、バジリスクって石化の邪眼的なもの持ってた気がするけど……まあいいか。

竜は普通に倒した、素手で。

「てっしゅ〜」

今回の剥ぎ取りのようなナイフはあまのむらくものつるぎ天叢雲剣でした。

神剣ですね、とても斬れました。

バシルーラで適当な山にでも飛ばしておいた。

「おか、え……………り……………」

「どうか、し……………た……………」

今日も平和だ、飯が美味い。

この後何があつたかは、ご想像にお任せする。

とりあえず、全属性のトライアングルクラスになったらしい！やったね！

## 第三話

誕生日だっちゃ♪

俺のじゃないけどな！

馬車で移動中なのだが、暇なので神に念話を繋いでみた。

(ラ・ヴァリエール領で、カタレン？さんの誕生会を開くそうです)

(……こちら側からしか念話は繋げない筈なのだがな)

(え？うつそく着拒とか酷くなくい？解除してよね)

(電話感覚!?!……もうよい、諦めた)

これがツンデレか……興味深い！

(誰がツンデレか!!)

強制遮断、合法ロリがなんのその。

もう、何も怖くない！

「ライナ、もう着くから起きなさい」

む、寝ながら思考していたようだ。

何時もどうりで何よりだ。

実に俺らしい!

ラ・ヴァリエール宅に着いたので、馬車を降りる。

屋敷を見て一言。

「すごく……大きいです」

いや、冗談抜きで。

ウチの屋敷が物置に見えるぜ!

……その考えだと、平民の家は犬小屋?

そんな、俺は、貴族に染まっちまったのか!?別にどうでもいいか。

ヴァリエール邸内に入ると、高そうな調度品や絵画が並び金持ちな印象を受けた。

まあ鎧や剣も多かったし、品の良い感じに整理されてる。

俺と両親はそのままゆつくりと歩を進め公爵がいる部屋へと向かった。

「どうしよう、父さん」

「ん?どうした?」

「やっちゃいそう」

「……アレだけはやるなよ?」

「……お、あそこだね」

「アレなのか!?!」

父さんをからかうのも飽きたのでドアを開ける。

その中では、二人の娘を抱えて頬擦りしているラ・ヴァリエール公しや——  
何も言わずに静かに扉を閉めることにした。

「どうしたんだ、ライナ？」

「部屋でも間違えたの？」

「……この前の二人を見た時の様な光景があった」

少し考えた二人の顔が、同時に赤くなった。

思春期の高校生かよ。

若いな、御二人さん！

「あ、あれわだな、その」

「こ、こっこ、子作くりよ！」

「そう！子作りだ！弟か妹どっちが良い!?」

「それとも両方が良いの!?!」

「墓穴掘ってる墓穴掘ってる」

ウチの二人はあわあわしてる。

ドアの向こうで、爆音が聞こえた。

(リアルカオス、マジキツイwww (笑))

(笑いながら言われても……)

とりあえずもう一度扉を開く。

見事な笑顔でこちらを出迎えてくれた公爵夫人と娘2人。

そして所々痣ができているラ・ヴァリエール公爵の姿を確認。

爆発したのに痣なの？

「ようこそリユートルー殿」

「此度は、お招きいただきありがとうございます」

口調は少し硬いがお互いの表情は笑顔で、親交の深さを表している。

知り合いだったのか？

いや、ウチの父は魔法関係で有名なからそれかな？

母さんは母さんと公爵夫人と井戸端会議的な何かを始めたようだ。

必然俺は残った二人の相手をする事になった。

片や笑顔でこちらをじっと見ているし、片や少し警戒している。

とりあえず話しかけることにした。

「どんな願いも一つだけかなえてやろう！」

空気読め？理由が無いな！

これが飾らない俺だ!! ネタ万歳!

(何故にドラゴ○・ボー○!?)

「えつと……」

「……アホらしい」

やっぱりロリ神の方がツツコミをわかってるな。

そこにしびれる、あこがれる!!

「ライナ・リユートルーです。よろしく」

嬉しそうに片方が——

「カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。仲良く  
しましうね?」

少し不機嫌そうにもう片方が——

「エレオノール……エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・  
ラ・ヴァリエールよ」

と、言った。

エレオノール嬢は10歳、カトレア嬢は今日で7歳だ。

てか、名前なげえ……

あ、ちなみに俺はすでに7歳になってるじえ!

「誕生日おめ」

(軽いわ!?)

「まあ、ありがとうライナ君」

(いいのか!?)

ナイスツツコミだ、神よ。

「が、誕生日プレゼントなど用意していない！残念だったな！」

(威張るな!!)

「それは残念ね」

(ニコニコしながら言われても！)

む!? 殺気!?! 何奴!?! ……ラ・ヴァリエール公爵と公爵夫人が見とる。

何故だ！俺が何をしたと言うんだ!!

だがしかし、俺に非が無いとしても逃げることは悪いことじゃない。

「それでは、誕生会で！」

脱兎、それは逃げるウサギの様子。

明日まで生きていられるだろうか。



## 第四話

召喚方法は、羽。

これチヨー便利。

「チヨコボってすげ〜」

《懐かしい名前だね〜》

《確かに懐かしいな〜》

暇だったから、カーバンクルとユニコーンを召喚してみた。

どんな攻撃も無効できて、死んでいなければどんな状態でも全回復。

純チートですね、分かります。

まあ、俺は死者も生き返らせることが出来るがな!!

ザオリクとかザラキとか。

(殺してる殺してる)

両親にフェニックスの魔石でも持たせとくか？羽の方がいいかな？

「ライナ君？」

「あいあい？」

カトウレア嬢やない？どないしたん？

あ、召喚獣2匹のことどう説明しよう？

「その子達は、ライナ君のお友達？」

「ん〜どつちかってゆうと仲間かな？」

《まあ、そうだね》

《私は戦闘以外でも使えるけどね》

「まあ！喋れるお友達なのね！」

《僕、カーバンクルのカールってゆうんだ〜よろしく〜》

《私は、ユニコーンのユニだよ》

「ご丁寧にも、カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです」

《名前長いね》

あ〜蚊帳の外に出された。

ぐれてやる〜うへへ〜

「ライナ君？」

《《あから》》

なんか途中から楽しくなってきた。

俺の周りには、一斬必殺『村雨』、再生の劍グロウウツイル、乖離劍エアなどが転がっている。

なんかこのまま放置するのも危ない気がしたから、全部圧し折って埋めておいた。  
多分、もうこの劍達は出ない。

「ライナ君」

「うん？」

「私の部屋に遊びに来ませんか？」

おっと、この御誘いはヤベエぜ!!

てか、もうすぐ誕生日じゃないの？ いいのかな？ いいか！

「別にいいよ〜」

《マスターがんば！》

《私達はそろそろ帰りますね》

「ああ、じゃあまたそのうち」

「また会いましょうね」

何を頑張るんだ？

・  
・  
・

カトレア（呼び捨てにするように言われた）の部屋に到着。

これが、アニマル王国。

ライオンキングは！シンバはいないのか!?

「ふふ、皆私の友達だから噛んだりしないですよ?」

「へ〜なかなか変わったお友達だね!」

（……友達のないお主が言っても）

……初めてだ、幼女に殺意を抱いたのはな。

む、犬が撫でて欲しそうにこちらを見ている。

選択肢はいドン!

①撫でる

②はたく

③無視する

④パルプンテ

よし、④のパルプンテに――

（アホか!?!アホなのか!?!犬に何する気じゃ!?!）

チツももう少し遅ければ……しようがない、①で撫でてやるか。  
つぶらな瞳が、俺を見る。

やめろよ、そんな目で俺を見るなよ!!

「か、かわいいな」(何気持ちよきそうにしてんだゴラア!?)

「ふふ、気に入られたみたいね」

(言ってることと考えてることが違うぞ)

「あ、そろそろ行かないとやばいんでないの?」(何残念そうにしてんだ犬畜生風情が!!)

「あら? もうそんな時間だったかしら? 楽しい時間はすぐに過ぎてしまうのね……それじゃあ行きましょう、ライナ君」

「はいよ」(次はパルプンテを使ってやるんだから! 撫でたいなんて思っていないんだからな! 毛並を揃えて待ってる!!)

(御主の方がツンデレであろう、しかも危険だし)

と言う訳で、誕生会に続く。

## 第五話

たりいゝ第六話に続く。

(まだ終わらせるでない!? 始まって一行で終わらそうとするでないわ!!)

神だからってメタ発言すな。

しゃあない、頑張るわ。

とりま、適当な所でフルウゝトウを食べてる。

(無駄に変な発音だのう……)

英語は苦手です。

でも、甲骨文字ならいけます。

(そっちの方が分からないと思うんだけども!?)

あ、これうまい。

ゝ誕生会終了ゝ

(早!? 何その適当さ!?)

特に何もありませんでした。

ずっと食べてるところでいいなら……

(あ、なら遠慮する)

さいでつか。

てか、最近出番多くね？

「ライナ君」

「あいよ〜」

カトレアだ。

なんかいろいろ持つてる、なんで？

あの四角い箱にリボンのラッピング……

「折角だから外でお散歩しましょう？」

「あいよ〜」

ああ、誕生日だっけ。

あれ？俺はプレゼントあげたっけ？

……そうだ！用意してなかったんだ！

〜散歩中〜

「ライナ君」

「あいよ〜」

「実は、私何かの病気なの」

唐突だね。

え？なに？どうしろと？

「昔から身体が弱くて、領地から出たこともないし、魔法だって使う度に辛くて……ふふ、なんでライナ君にこんなことを言ってるのかしら」

俺が聞きたいんだぜ！

まあ、どんな病気かどうかなんてちよつと身体を透かせば……

（普通出来んからな？出来んからな？それ普通ちやうからな？）

「もしかしたら、ライナ君なら………いえ、ごめんなさいなんでもないわ」  
笑顔なんだけど、暗いな。

あれだ、その笑顔は似合わん。

それに、そう言われると気になるのが人間だぜ？

「とりあえずこれ飲んどけ」

そう言って、俺はポッケから一つのピンを取り出す。



「てれててつてて〜エ〜リ〜ク〜サ〜」

今ならどこでもドアが出せる気がする。

まあ、俺にはルーラがあるからいらないけどな！

行つたことない場所は……ちよつと、ね？

「えりくさー？どこかで聞いた様な……」

「とにかく飲め、一気に飲め、もう何でもいいから飲め」

「え？う、うん」

カトレアがエリクサーを使った。

カトレアの体力、魔力、状態異常が完全回復した。

唐突だけど、ラーメンが食べたい。

トンコツ醤油がいい。

(塩味噌の方がいい)

「え？え？身体が、軽い？………な、治つたの？」

「我がエリクサーに、治せぬもの無し！」

(スパロボOGのゼ○ガー!?)

斬艦刀創ろうかな。

悪を絶つちやうぜ！

ついでに国も斬っちゃうだぜ！

(その世界の国逃げてー)

「……あ、ありがとうライナ君!!」

「にゅふよわ!」

カトレアが泣きながら抱きついてきた。

母や別荘のメイドさん達ぐらいにしか抱きつかれたことがないのです。

本宅はリユートルー一家だけで暮らしてて、別荘にはメイドさんがちゃんという。

ウチの父は実には変わり者だな！

(……)

今絶対、お前が言うなって思っただろ。

(なんのこともかわからんな)

まあいい。

別荘のメイドさん達は何故か皆20歳前後だったな。

いや、前の世界では、女性がいることすら忘れてたからなく

意外と初心な私です。

(その割には余裕じゃな)

きーこーえーなーいーなー

「ライナ君！私お母様達に言ってくるね！」

「わたわた……」

カトレアが屋敷に入っけていった。

暇になった、最近どうよ？

死人多いんでないの？

転生者一杯かね？

(まあ、大変じゃな……一応言っておくが、お主の所には転生者は送らんからな？)  
なんかすごい大事になるまで、ロリさんと話していたのだった。

## 第六話

誕生会も終わって他の貴族が帰った後、呼ばれたので来た。

「貴方のおかげでカトレアの病気がなくなつたようね。感謝します。ありがとうございます」

「私からも礼を言おう。ありがとう」

公爵と公爵夫人にお礼を言われた。

カトレアは俺を見てニコニコ、カ、カ、カ、カレイドスコープさんは何故か俺を睨んでい  
る。

とりあえず、使い魔が欲しい今日この頃。

(毎回毎回思考が飛ぶのう)

だつて気になるだろ？

俺の使い魔だつたら、ダークドレアムかな！

(……いや、あれは召喚しちやダメな奴じゃろ?)

えゝまあとりあえず、使い魔のことは置いておこう。

「残念だけど、お礼が欲しくてやったわけではないのよね」

「そう？なら力づくでも受け取ってもらおうかしら？」

戦闘ですか？え？なにそれ、怖い。

「カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールが貴方に決闘を申し込むわ」

何故に？お礼だよね？お礼なんだよね？

誰かなんか言つてよ。

教えてくれ、ゼロは何も教えてくれない……

「ライナ……頑張れ」

「死なないようにね」

「ライナ・リユートル君……諦めたまえ」

「ライナ君、頑張つて！」

「フンッ！」

（ま、御主なら負けんじやろ）

上から父、母、公爵、カトレア、エ、エ、エレ、エレノーレだ。

最後の人、誰だっけ？

あとおまけで神。

（扱いが酷いぞ……あと、エレオノールじゃ）

くそんなこんなで何故か決闘く

場所は移つて屋敷から離れた草原。

「準備は良いかしら？」

「良くないです！」

「それでは始めましょう。烈風のカリン、参ります」

ハナシヨキイテー

てか、名乗り方がなんかカッコイイ。

(我がつけてやろう、そうだな、殲滅の〜とか、滅びの〜とかかの?)

中二病ワロス。

(やかましいわ!)

「小手調べといきましょう」

カリン様がそういうと、竜巻出た竜巻。

バギク羅斯を同時に3つだと!?

なら俺は——

「マホカクタ」

(せこい!?)

勝ったもんがちっしょ?

目の前にA○フィールドのようなモノが出てくる。  
カリン様の竜巻を反射し、カリン様に向かわせる。

「ほお………ならこれはどうでしょう？」

竜巻倍ドン!?

ええい！引退後の魔法使いは化け物か!!

ならばこちらもやったるでえ〜

「マヒヤド」

辺り一帯に吹雪が吹き荒れる。

竜巻凍ったぞ！魔力込めすぎたかな？

反省はしていない、後悔もしていない。

プギャー

(図々しい!?!?そしてウザイ!!)

「ベギラマからのバギマ」

ベギラマの炎でマヒヤドの氷を溶かし、バギマの風が解けた氷の水を吹き飛ばす。

綺麗に掃除完了。

まあ、元々屋敷の方には被害無いから掃除の必要無いけど。

(そこまで操作できたかの?)

気にしたら負けだぜ？

(それもそうか……そうか?)

幼女は無視して歩き出す。

カリン様の搜索をしないと。

なんて言われるんだろうか？

む、アレは……カリン様？



## 第七話

「ここまでの力とは……いえ、これは慢心ね。貴方が子供だからと、油断した私のミス

……何故だろう、死ぬ気でやらないと殺される気がする。

てか無傷かよ。

チートや！チーターや！

(我は、用事を思い出した)

安心しろ、汝と俺の痛覚を共有しておいた。

俺が死んだら、お前も死ぬぜ？

(何故に!?!とゆうかどうしてそんなことができる!?!)

自分も、勢いでやったから。

気合は物理法則すら超えるといいな。

(……御主を転生させたのは、我の唯一の間違いだ)

……フツ、一緒に逝こうぜ？

大丈夫、痛いのは相手次第だ。

(痛いのはイヤじゃああ!!!!)

「あっはっはっはっはっは!!」

「あら? 笑っていられるなんて余裕ね……私も全力でやらせてもらうわ」  
……俺知らね。

(……私も関係無い)

とりあえず、ノツテみる?

(ええい! やつてしまえ!)

許可が出たのでデカイの逝きまゝす。

(我のせいにする気か!?)

無視無視。

ちよつくら本気出すかね。

「さあ、楽しいダンスといきましょう」

「なら一曲、踊ってもらいましょうか!!」

竜巻が……X? 多すぎやでえ

他にも、見えない刃やらなんやらが飛んできてる。

どうしよう!

①ギガデインで一掃

雲を創るのに時間がかかる。

②ビックバンで一掃  
オーバーキルの予感。

③マダンテで滅殺

殺しちゃ駄目じゃん。

④頑張る

よし、これにしよう！

「火水土プラスギガスラツシユの……エターナル・デッド・エンド・ストライク永劫と終わりの死の衝撃!!」

(はいはい、中二病乙)

幼女が冷たい。

ボケは、ツツコミに冷たくされると、死んじやうんだよ？

とりあえず、あらゆる魔法を消し去る光の剣の魔法を振り回す。

微妙に矛盾してるが、気合で何とかなるのよね。

だってそれがご都合主義！

(よいぞ！その調子で勝ってしまえ！)

そんなに痛いのがヤなのかな？

ナイフが飛んできた。

「あ」

(あ)

掴み損ねた。

肩にナイフが刺さる。

意外と痛い。

「イッタアアアアア!!!」

(ギニャアアアアア!!!)

痛みの中の打ち回っていると、何時の間にか横に来ていたカリン様がレイピアを突き付けていた。

「私の、勝ちね?」

普通ここまでするか?

忘れてるかもしれないけど、俺、10歳にもなってないよ?カトレア嬢と同じ、7歳よ?虐待反対!

てか、勝とうと思えばここから勝てるんだけど。

みんな大好き、しっぷう突きを俺の力で使えば、敵は死ぬスイーツ。

あとパルプンテとか!

まあ、勝つ必要性は無いんだけどね。

「はい、負けです」

「では、お礼を受け取ってもらえますね？」

「はい……あれ？」

よくよく考えたら、おかしいよね？

お礼なんだよね？お礼がしたかったんだよね？

(いたいイタイ痛いいたいイタイ!!!)

(やかましいわ！)

(せめてナイフを抜くんじゃ！)

(しょうがねえ〜な〜)

まったく、わがままな幼女だぜ！

肩に刺さってたナイフを抜く。

抜く際少し肩を挟ってみた。

(フイによハにやふよおおおお!!!)

楽しいが、俺も痛い。

回復しとくか。

「ベホマ」

これで全快だぜ！

(……………)

返事が無い、ただの屍の様だ。

「では、戻りましょうか？」

「あいよ〜」

ちなみに今までの戦闘で、周囲は大変なことに。

とりま、周りの被害は気にしない方がよろし。

てか、この御方まだ余力残してるよね？

これが年のこ、え、あの、何を？まつ!?アツ

!!!

## 第八話

俺は幼女と、旅に出る！

ピカ○ユユ！

唐突過ぎるが旅に出た。

旅の準備なんて何もないぜ！

ついでに、ここまでのあらすじを回想しよう。

お礼として、侯爵夫人がカトレア嬢を妻にとくれた。

何故に？

侯爵がボイコットを起こしたが、二秒で沈黙した。

これは納得。

カトレア嬢もすごい嬉しそうにニコニコしてた。

だから、何故に？

俺、当然逃げた。

父と母は見捨てましたが、何か？

今ここ。

俺の真のヒロインは幼女神……は、遠慮しとくかな。

(何故じゃ?! 我のどこが不満なんじゃ?!)

どこが……フツ君の全てさ。

(全否定?! そういう使い方じゃないと思うんじゃが?!)

いや、幼女は面白くていいや。

うん、俺幼女好き。

(それだけ聞くと、ロリコン発言に聞こえる)

もう、ロリコンで、いいや。

(ダメじゃろ?!)

カトレア嬢、俺が逃げた時もニコニコしてたな

……一旦戻ろうかな?

なんか嫌な予感しかしない。

(まあ頑張れ。我は良く考えたら忙しい。神とはいえ、仕事が多くて困るのじゃ。では

またな)

え、つまらん。

誰か新しいコンビ組んでくれないかな

あ、風韻竜発見。



しかも幼体か？てか怪我してるし。

「大丈夫か？？死んでるか？？」

……ふむ。

返事が無い。

「なんだ、ただの屍か」

スルーして歩き出す。

背後で風韻竜の屍骸が輝いた。

「し……んで……ない、のね」

「人になった、最近の風韻竜はすごいな、いや、普通か」

「うう……痛い、のね」

「ベホマベホマベホマベホマベホマ」

過剰回復。

痛いのは良くない。

痛いの痛いの悪人に飛んでけ

「うう……い、たくないのね？」

「それはよかった」

うんうん、痛くないのは良いことだ。

そして、よく見ると可愛いな。

ついでに、スタイルも大変よろしい。

ただ、俺は胸よりも関節の方が好きなんだ。

よく曲がる関節は好物です。

……ツツコミが無いと、つまらん。

「助かったのね！きゅいきゅい！」

「どういたしまして」

「イルククウ！」

「は？」

「私の名前なのね！イルククウ!!」

「あ、そう。俺はライナ・リユートルー」

「ライナなのね！きゅい！」

抱きついてきた。

……こいつ、今、裸なんだよね。

テンパって無いよ？

胸になんか興味ないもん！

「は、はは、ははは放せ!?!」

「きゅい？」

明日に向かってダツシユする。

コレは逃走ではない、明日への前進。

「待つからね！」

「くるなあああ!!」

俺はいつでも、クールなんだよ、淡白なんだよ、無関心なんだよ。  
でも時にはおちやめめにふざけるのです。

だから——

「せめて服を着ろおおおお!!」

「そんなもの無いのね！」

父さん、母さん……旅の仲間が、出来ました。

## 第九話

イルククウと一緒に笑いのお笑いの頂点を目指すことにした。

自宅に戻ってきたら、カトレアに見つかった。

お笑いの頂点は諦めることにした。

「何故、我が家にいる?」

「女の勘です♪」

これが噂の女の勘!

すげえぜ……勝てる気がしねえ。

てか、俺も女の勘欲しい。

「……私では、ダメなのですか?」

目をウルウルさせながら言ってくる。

もう、ロリコンでいいや。

ホント可愛いなあ

……まで、同じ年だから、俺はロリコンじゃない!? (驚愕)

「ダメなのね!」

「むむ！貴女は誰ですか？」

「イルククウなのね！」

「そうですか。貴女には関係無いと思うのですが？」

「私は今ライナと旅をしてるのね！きゅいきゅい！」

「……むう」

「……きゅい」

これが所謂、女の戦い。

何故戦っているかはわからんがな。

とりあえず俺は、両親に旅に出る旨を伝えた。

母は、「気をつけてね？怪我しない様にね？」

父は、「ちゃんと帰ってくるんだぞ？わかったな？」

そう言った。

サラツとし過ぎてて、どうせいない間にイチヤつくんだろうと思うと、悔しくなった。  
強力な媚薬をプレゼンツ。

（数分後）

両親に挨拶して争っていた二人のところに戻ってみると……

「それじゃあ、ライナ君のこと、よろしくね？」

「わかったのね！きゅいきゅい！」

仲良くなつてた。

何故に？俺がいない数分の間に何があつた？

「ライナ君……私、待つてるからね？」

「え？……あ、はい」

カトレア嬢が我が家の中に入っていった。

何故入る？

これは、外堀から埋められてる？

「……行くか？」

「きゅいきゅい！」

と言う訳で、レッツゴー！

もう俺を止められる奴は——

「あ、妾はイルククウちゃんも入れて最大で6人までだからね！」

……アンタはもう完全に俺の本妻か？

カトレア嬢、病が無くなつてから自由に生きてるな……むしろ、崩壊してる気がする、

性格とか。

というより、妾いいんすか？

(原作とかも崩壊しておるな)

あ、久しぶりの幼女神だ。

おっひさ〜元気してた？牛乳飲んでる？背伸びた？

仕事はちゃんと終わらせたか？

(暇を作った、仕事中に呼び出されたらかなわんからな。それと、牛乳などいらん！身長だって……身長、だって……)

牛乳は大事だぞ？

特に成長期には。

まあ、一緒にいたかつたんだろ？ツンデレだもん。

(……さあ、な)

幼女はやっぱ可愛いな。

唯寂しかったただけだろうに。

さてさて、行きますかね。

「旅は道連れ、世は情けつてな」

「きゅいきゅい！」

そして俺達が旅に出て、十数年の月日が流れたのだった。



## 第十話

24歳になった。

飛びすぎかな？

ちよつとあらずじ回想。

10歳、トリストイン魔法学院に入学してみた。

学園長のオスマンが覗きをするたびに鉄拳制裁をしていたら、クラスメイト達（特に女子）からよく話しかけられるようになった。

ギトギト先生が喧嘩吹っ掛けて来たので、全力で買ってやったら学院が半壊した。

入学時は崩壊のライナだったのが、終焉のライナになった。

使い魔召喚の儀式で使い魔を召喚したら、学院が半壊した。

呼び出された使い魔は五体である。

卒業と同時に教師に誘われたが、人に教えるとか面倒なので逃げた。

13歳、デルフリンガーを買った。

意外と面白い奴だった。

一緒に旅をすることになった。

15歳、タルブ村で佐々木 武雄と出会った。  
地球から来たらしい。

俺とイルククウとデルフリンガーのテンションについてこれなかったようだ。

そのうちまた来ると約束した。

16歳、ド・モンモランシ家領内に侵入。

モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシことモンシーにハイポーシヨンとハイエーテルの作り方を教えた。

モンシーの母親が俺を殺そうとしてきた。

体にくっつか穴をあけられた。

とても痛かった。

怖いので、明日に向かって走り出した。

これ、人は逃亡という。

16歳、ツエルプストー家領内に侵入。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーことキュルが、男で遊んでいた。

キュルが老公爵と無理矢理結婚させられるところを間違つて邪魔してしまった。

なんか、もう、いろいろ燃やされかけた。

領外に走り出した。

17歳、グラモン伯爵家領内に侵入。

ガラス職人としていけるかと練習していたら、弟子入りしようとしてきた。

グラモン家総出で。

ドラクエシリーズのIからXまでの勇者とその仲間達をいろいろな鉱物を使って完全再現したのがいけないのか？

それとも、ヴァル○リー・プロ○アイルの主人公勢をいろいろな鉱物を使って完全再現したのがいけないのか？

俺としては、イセリア・クイーンの完全版が最高傑作。

もちろん逃げた。

17歳、ガリア王国領内に侵入。

シャルロット・エレエヌ・オルレアンことシャルと仲良くなった。

ハシバミ草が好きらしい。

その母は、シャルを溺愛していた。

娘は可愛い！娘最高！とか言ってるさかだったので逃走。

今どうなってるか知らない。

18歳、アルビオン王国サウスゴータ地方、ウエストウッド村に侵入。

ティファニア・ウエストウッドことティアとイルククウが仲良くなった。

マチルダ・オブ・サウスゴータことマチさんは、ティアのことを大事にしてるようで、よく追いかけられた。

一番平和な場所だった。

それでも俺は、旅に出る。

18歳、トリステイン王国領内に侵入。

アンリエッタ・ド・トリステインことアンリにお菓子を作った。

アンリに懐かれた。

アニエス・シュヴァリエ・ド・ミランことアニーに撃たれたり、斬られたりされた。

死ぬかと思った。

またまた、逃走。

19歳、アルビオン王国領内に侵入。

ウエールズ・テューダーことウエー君にアンリの事を聞かれまくった。

ジェームズ1世はティアと何か関係があるようだ。

ウエー君がうざいから、また逃亡。

20歳、ビダーシャルとゆうエルフに会った。

戦った、和解した、良い奴だった。

先住魔法？とゆうのを教わった。

またいつか会おうと約束して別れた。

21歳、ロマリア皇国領内に侵入。

ジュリオ・チェザーレことジュオと殴り合いをすることになった。

スパーヤサイ人化してフルボッコにしてやった。

……初めてのスパー化がこれって、シヨボくね。

とりあえず、何か言われる前に逃げた。

22歳、王都トリスタニアのチクトンネ街にある大衆酒場兼宿場「魅惑の妖精」亭で

休憩。

ジェシカは良い娘だった。

偶然居合わせたシエスタとゆう子も良い娘だった。

スカロンさんは、うん、遅しかった。

滅茶苦茶気に入られてしまった。

全力で逃げた。

22歳、ラ・ヴァリエール領内に侵入。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールことルオージ……間違

えた。

ルイちゃんに魔法を教えてみた。

ラ・ヴァリエール公爵が吹き飛んだ。

そして、カリィヌ・デジレ・ド・マイヤールことカリン様に殺されかけ……殺された。

何故カラ・ヴァリエール公爵も一緒に殺された。

公爵と一緒にフェニックスの羽で生き返った。

死ぬ気で逃げた。

カトレア嬢は、偶然いなかったらしい。

・  
・  
・

・  
・

・

……意外と好き勝手したな。

まあ！後悔も反省もしないがなあ！！

それに、他にもいろいろやってるし。

「んん？鏡？」

現在一人と一匹と一本で、空の旅をしている。

真っ直ぐ行つた所に、鏡っぼいのが浮いていた。

『あくアレは使い魔召喚だ』

「へ〜……イルククウ、わかっているな？」

「きゅいきゅい！」

『マジか……』

「突っ込めえ!!」

「きゅい！」

そして俺達、一人と一匹と一本は召喚された。

幼女神のツツコミが無いのが寂しい、と思うライナだつたりする。

## 第十一話

おふう……人いっぱい。

お〜ルイちゃんだ、驚愕しているな。

それに俺達をよんだシャルは、何で嬉しそうなんだ？

傍目から見ると無表情だけど。

あとキュルじゃん、睨まんといて。

おお、モンシーまでいる！キラキラした目でこっちを見てる。

あ、グラモンの少年もいた、そのモグラはなんだ？

それにしても、知り合いが結構いるな。

とりあえず――

「よばれました」

「……よんだ」

やっぱシャルが俺のご主人様かな？

契約ごときで俺を縛れると思うなよ！

破戒<sup>ル</sup>す<sup>ル</sup>べき<sup>ブ</sup>全<sup>レ</sup>て<sup>イ</sup>の<sup>カ</sup>符<sup>カ</sup>で契約破棄しちゃうぞ♪



(少し落ち着け)

久しぶりの幼女だ！でもそんなの関係ない！

だって、久しぶりの人だぜ！いやっほおほおほお！！

俺は今！猛烈に！熱血してるううう！！

(……いったん無視しよう。キング○リムゾン！)

.....

.....

.....

(結果のみが残る)

なんか時間が飛ばされた気がしたぜ。

まあいいか。

「サイト君やサイト君や」

「あ、ライナさん」

俺がこの少年、平賀才人とどうやって知り合ったか？

安心しろ、しっかり回想してやる。

(何様!?)

俺様さ!上から目線過ぎる?

だからどうし——

く少し前の回想く

シャルと契約した。

なかなかプリプリとした感触だったじえ。

使い魔契約だよ?他に意味は無いよ?

人がいるときはタバサと呼ぶことになった。

ついでにイルククウをシルフィードと呼ぶことになった。

てか、使い魔だから勉強する必要が無い。

まあ、使い魔じゃなくても勉強する必要が無いんだけどな。

その後、ルイちゃんがサイト君を召喚した。

契約の激痛で気絶したサイト君を無理やり起こして、デルフリンガーをあげた。

デルフリンガーも満更でもない様だ。  
なんか少し寂しかった。

キュルが俺の事を狙っているようだ。

燃やされない様にならないとな。

キュルの周りの男共も突っ掛かってきたので、二度と逆らえないようにした。

モンシーがまた薬の作り方を教えて欲しいと言ってきた。

……年齢作用薬でも教えてやるか。

だが、媚薬はいかんぞ。

アレは必ず別の奴が飲むから。

グラモン少年ことギーシュ・ド・グラモンことギー少年。

弟子入りしようとしてきた。

面倒だったが、ヴァルキオー・プロファールのヴァルキリーを透明度と純度の高いミ

スリルで創ってやった。

物凄いい感動していた。

創ったヴァルキリーは回収しておいた。

良い出来だからな、放置するのは勿体無いのでシャルの部屋に置かせてもらって

る。

ハゲ……ジャン・コルベールさんにいろいろ言われた。

コルさんや……そう焦りなさんな。

昔のことは言わんよ。

フサフサ時代のこと、思い出したくないんだろ？

わかる、わかるよ。

今が惨めになるモンな……え？違う？

トリステイン魔法学院の学院長のオスマン。

俺は狸と呼ぶことにした。

エロ狸と、な。

だって、スカートの中を使い魔に覗かせるんだぜ？変態やん。

シャルの近くに来たらグングニル投げる予定。

マチさんともいロングビルが、俺を追いかけてきた。

全力で逃げた。

結局捕まった。

狭過ぎるぞ、この学院。

マチさんのホントの名前を隠すように言われた。

別にいいじゃん、土塊のフーケって言うわけじゃないんだし。

P.S. マルソーさんの料理、美味過ぎる!!

(何故にス〇エエエク!?)

く回想終了く

「とまあこんな感じだ」

「何のことですか？」

「気にしない気にしない」

脳内駄々漏れじゃないよな？

ちゃんと回想だったはず。

そうだろ、幼女？

(何時ものことじゃろ？それと幼女じゃなくて、神じゃ)

そういばそうか。

幼女神、俺、頑張るよ！

(幼女神ゆうなや)

## 第十二話

サイト君が決闘だつてさ。

サイト君がシエスタを庇つて、ギー少年と決闘することになった。

サイト君、手が早すぎるよ（笑）。

（笑いながら考えるな、変態）

幼女に突つ込まれる俺。

だがそこが良い！

もつと！もつと突つ込んで！！

（ホントに変態になつてる!?!）

さて、幼女との絡み合いもほどほどにしてサイト君を探さないとな。

主人公な俺は、常に望んだ相手と会える！コレがご都合主義！コレが運命力！！

つまり、学校の中庭に出たらサイト君を発見した。

「お、いたいた………サイトく〜ん」

「あ、ライナさん！」

おや？シエスタと一緒に何してんだ？

……ああ、性欲をもてあましてたのね。

「ごめん、空気読めなくて」

「何のことですか？」

「気にすんな」

まあ、邪魔しちやったものはしょうがない。

にしても、サイト君からはリア中の香りがするな。

まだ未発達のリア中の香りだ。

将来ハーレムを築くかもしれない。

「サイト君、決闘するんだって？」

「そうです！ライナさんからも言ってくてください！」

「大丈夫だよ？さっさと勝って来い」

「え？」

なんでサイト君まで驚いてんだよ？自分から挑んだんだろ？

てか、お前さんはガンダールヴだろ？

デルフリンガーは何も教えていないというのか！！

「デルフリンガー、たしかサイト君の使い魔のルーンって……」

『おう、お前の考えてる通りだよ』

「なら大丈夫だつて」

「何の、話ですか？」

「いいからやれよ。とつとと行つて来い……バシルーラ」

「うお!!」

サイト君、星にな……らない。

強制転移しただけだし。

星にしようと思えば出来るけど、止めた方がいいよね。

「な、何してるんですか!？」

「まあまあ……あ」

シエスタの後ろを指差す。

「え?」

シエスタが振り返る。

「何もないじゃないですか……あれ?」

俺、いない。

・  
・  
・



サイト君T U E E E E E。

まあ、それなりにだけど。

あの程度なら魔法無し、身体強化無しの左手一本で十分だな。

あ、俺右利きね。

戦闘？カットに決まってるでしょ？

ヌル過ぎてつまらん。

「ライナさん！俺勝ちましたよー」

「よかったね〜」

ずいぶんと興奮してるな。

エロゲーだったらこのあと、エロシーンだろうか？

気絶したギー少年をサイト君が……想像するんじゃないかった。

（何故わざわざサイトとギーシユをくつつけた？）

なんとなく。

よくあるじゃん、負けたらヤラれる的な。

「し、師匠」

弟子にした覚えはない。

が、面白そうなので弟子にしてやるかな？

モンシーも弟子みたいなものだな。

国一つ半壊できる程度の実力はつきたいな（笑）

「明日の早朝、外に集合な？」

「……は、はい！」

嬉しそうにしゃがって……とりあえず蹴っておくか。

なんか死にかけての気がするけど、モンシーが秘薬使ってるから大丈夫だろ。

「デルフ、ライナさんって……強いのか？」

『ああ、次元が違う。敵になった瞬間終わりだな』

「ふくん。でも、メイジってやつだろ？なら近づけば終わりじゃね？」

『相棒……そんなんだといつか痛い目見るぞ？』

「そうかな……そういうえば、バシルーラってドラ○エじゃなかったっけ？」

聞こえない様に話してるんだらうけど……ま、いいか。

それとライナ君、デルフの言う通り調子に乗りすぎだぞ？

てか、ド○クエを知っているのか。

その後、サイト君がルイちゃんに怒られて、お仕置きされていた。笑って眺めていたら、シャルに叩かれてしまった。げせぬ。

## 第十三話

ギー少年のゴーレムをアイアンクローで粉碎した。

泣かれたのでアドバイスしてやることにした。

魔法で対抗するまでも無いんだもの。

「弱すぎじゃね？脆いし、遅いし、応用性もないし」

「……」

メツチャ落ち込んでる。

どうでもいいので気にしないことにした、ソレが俺クオリティー。

てかゴーレムなんだから同じ大きさで同じ形にしたら意味なくね？

いくら壊されても替えがきくっていうのがゴーレムの強みだけど、強さは術者次第なんだしき。

せめて大きさを変えて相手が慣れないように工夫するとかさ、あるじゃん？

言わないけど。

「よし、これからは銀でゴーレムを創れ」

「え？まだ、そこまで操れないんですけど……」

「え？銀使えないの？」

「は、はい……」

あ、銅までしかできないんつすか？

そうつすか。

で、それがどうした？

「……」

「……」

「……」

「……」

「……死ぬ覚悟はしておけよ？」

「……はい」

しかたないから銀を操れるぐらいにはしてやるか。

てか、なんとなく面白そうだし。

とりあえず、遺書を書き始めたギー少年を地面に埋めてみた。

地面から啜り泣きが聞こえてきて、夜に聞いたら軽くホラーだと思った。

ここに幼女を連れてきたら怖がるかな？かな？

「……ずるい」

なにがずるいんだ、シヤルよ。

てか、唐突過ぎるぞ？台詞も登場の仕方も。

そして俺の背後に這い寄るんじゃないやありません。

どこの混沌だよ。

いいぞ、もつとやれ。

「私も鍛えて」

「ふむ……いいだろう、で？他に用事があるんだろう？」

なんかソワソワしてる様に見える……気がする様な、気がしない様な。

言っておこうか、モジモジしてるメガネっ子萌え

写真撮りたい、飾りたい、使いた……失礼。

「母様のことで……」

んん？あの親バカがどうした？

ついに鼻血の出し過ぎで死んだか？

それはないか（笑）

きやつはシヤルがいる限り永遠生き続けるに決まってる。

・  
・  
・

心の病は、精神科に行ってください。

……俺にどうしろと？ 万能薬でも渡すか？ どこにしまつてたっけ？

なんとなく、自分の影に手を突っ込む。

シャルの驚いた顔、5千万。

「っ!? ……それ、何？」

「ん〜？ 影の倉庫だけど……お、あつたあつた、ほれ」

「……これは？」

「万能薬。それを飲ませれば治るっしょ」

「ホント!？」

おいおい、近いよ。

キスするぞ? ……やっぱり離れてください。

寒気と一緒に、ある笑顔が思い出されたぜ。

いつもニコニコ、正妻の余裕で受け入れますって感じが……うん、心臓に悪いな。

「落ち着け……とりあえず、アイツんどこ行くか」

「?.....どうやって?」

首を傾げる姿が可愛い。

おっと、鼻から愛が溢れそうだったぜ。

マスコットキャラとしての幼女のポジションが無くなるな。

(我はマスコットだったのか!?)

あとツツコミ。

ツツコミをなくしたら.....ごめん、俺の口からはとても.....

(存在を消される!!絶対に消えたくない!)

じゃあ、ツツコミ頑張れ。

ソレが幼女のクオリティー。

生きたいならばツツコミを入れろ!

(.....はめられたのか、我は.....)

人生そんなもんだ。

ちなみに、この幼女との会話は約3秒の出来事である。

クロックアアップは素晴らしい。

(みじか!?)

お前に、それ以上の価値があるとでも?.....身体は最高だったな!



てか、神って暇なのな。

とにかく無視だ、話が進まん。

念話強制終了で。

「じゃあ行くぞ、シャル」

「？」

とりあえず手を掴む。

意味が分からず、小首を傾げるシャル。

あら可愛い、テイクアウトで!!

「ルーラ」

ガリア王国に飛んでみた。

密入国？犯罪？知らんな。

あ、ギー少年忘れてた。

・  
・  
・

・  
・

・

「義母（おかあ）さん！俺に娘さんをくだグハツ!?」

「義母（おかあ）さんなんて呼ばないで!」

「おま、酷くね? 命の恩人じゃないけど、心の病を治した相手にこれは酷くね?」

いきなり蹴るなんて……俺なんかした?

義母（おかあ）さんとしか言つてないぜ?………それか!

「シャルロット!」

「お、お母様……」

「いいの。いいのよ。また、昔みたいにお母さんつて言つても」

「……お母さん!!」

「ごめんなさい。ごめんなさいね。辛かったよね? 苦しかったよね? 寂しかったよね? ずっと一緒にいたのに、一人にしてごめんね?」

「う、うう……」

親子の感動のご対面。

俺、空気、読む。

部屋の隅つこでお口チャック。

そういえば使い魔になったこと言わないとなく……きつと襲い掛かってくるぞ。

襲い掛かつて来る方に、オリハルコンを十トン賭けるぜ。

「なあ、義母（おかあ）さん」

「義母（おかあ）さん言うな！」

「俺、シャルの使い魔になつたんだ！」

「死ね」

「あぶな!？」

首落とす気で攻撃してきたぞ!？」

ウオーターカッターは普通の人に当てたら死ぬんだぞ!？」

まあその程度じゃ死なないけど、でも痛いんだよ!？」

ホント、俺じゃなかったら避けることすらできずに即死だぞ？

ああ、俺だからやったのか。

「使い魔ということとは……キス、したんでしょ？」

「……」

「どうだった？」

「……最高にプリプリだったぜ！」

「じゃあ死になさい!!」

「母親怖いって怖いね！シャル！逃げるぞ！」

シャルを小脇に抱えて窓の縁に足をかける。

上を見て天井が無いのを確認。

室内だと使いづらんだよね、ルーラ。

「……行つて来ます」

「待てこのクソ虫!!行つてらっしやいシャルロット♪首を置いてけやああ!!」

俺とシャルで態度が違う!?

まあ、いいけどな。

これも、一つの愛情表現……あ、俺の首の皮ちよつと切れた。

「娘は貰つていくぜ!ルーラ!」

……俺、悪役になつてない?

いいもんいいもん!

シャルがいれば何とかなるから!

幼女最高!……うん。

(……頑張れ)

……頑張る。

・  
・  
・

時間は過ぎて、夜。

「酷いのね！私も行きたかったのね！」

「すまん！存在を忘れてた！」

「酷過ぎるのね!!」

「我慢する」

「おねえさまくうう……」

そういえばこいつと旅してたんだっけ？

最近ド忘れが激しくてさ。

イルククウだから忘れたわけじゃないんだぜ？

オレ、イルククウ、ナカマ、ダイジ。

「しょうがない奴だ、ほら、お前の好きな霜降り肉（食べると好感度が上がるよ♪）だ」

「ライナ大好きなのね！きゅいきゅい！」

変わり身の早い奴だ。

まあ、竜だしな。

花より団子だよな。

ついでに言うと、好感度はすでにMAXだ。

「シヤルもなんか食うか？よかつたら作るぞ？」

コレでも料理の腕には自信がある。

マルトーの旦那の料理には、勝てると思わんがな。

あの人は、俺にとっての料理の神だ！

「ハシバミ草」

「よし、ならサラダとかでいいか！」

それにしても、意外と楽しい使い魔生活だ。

ただ、勘が鈍るな。

そして全力が出したい。

ふむ……今度はっっちゃけるかな。